

machi-myu guide book

甲府市朝日町周辺 編

甲府でのハネ・ムーン時代の太宰治
ゆかりの地めぐりと、
昭和懐かし木造建築見学



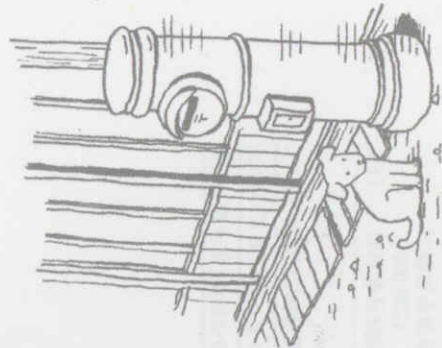
ぬりえにチャレンジ!

甲府市朝日町周辺 編

まちミュー友の会

特定非営利活動法人つなぐ (つなぐNPO)
つなぐほんぽん屋
〒400-0031
山梨県甲府市丸の内1-11-1207
Tel&Fax 055-228-8633
<http://www.2a.biglobe.ne.jp/~yamaku/>

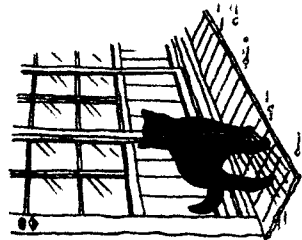
200円 (税込)



甲府でのハネ・ムーン時代の太宰治ゆかりの地めぐりと、昭和懐かし木造建築見学

—— ツアーコース ——

- 02 太宰治の妻・石原美知子さんの実家跡
- 03 当時を偲べる昭和木造建築
- 04 太宰治が一時住んでいた寿館跡
- 05 参道の敷石が残る清運寺
- 06 太宰治が通った酒屋(窪田酒店)
- 07 太宰が通ったお風呂屋(喜久の湯)
- 08 付近にある昭和木造建築
- 09 太宰治が通った豆腐屋さん
- 10 太宰治夫妻新居跡
- 11 御崎神社
- 12 内田宏さん昭和のお宅拝見(思い出写真拝見)
- 13 昭和和洋折衷木造住宅須田家お宅拝見
- 14 昭和懐かし駄菓子屋さん竹川菓子店で
人気の紅梅焼きを
- 15 人気のトマソン風焼き芋屋さんで焼き芋を
- 16 和楽器の店・山形屋琴三絃店
- 17 昭和風建具屋さん 渡辺木工所
(手づくり家具も買えます)



N
4

太宰治と昭和の懐かし 木造建築ツアーマップ

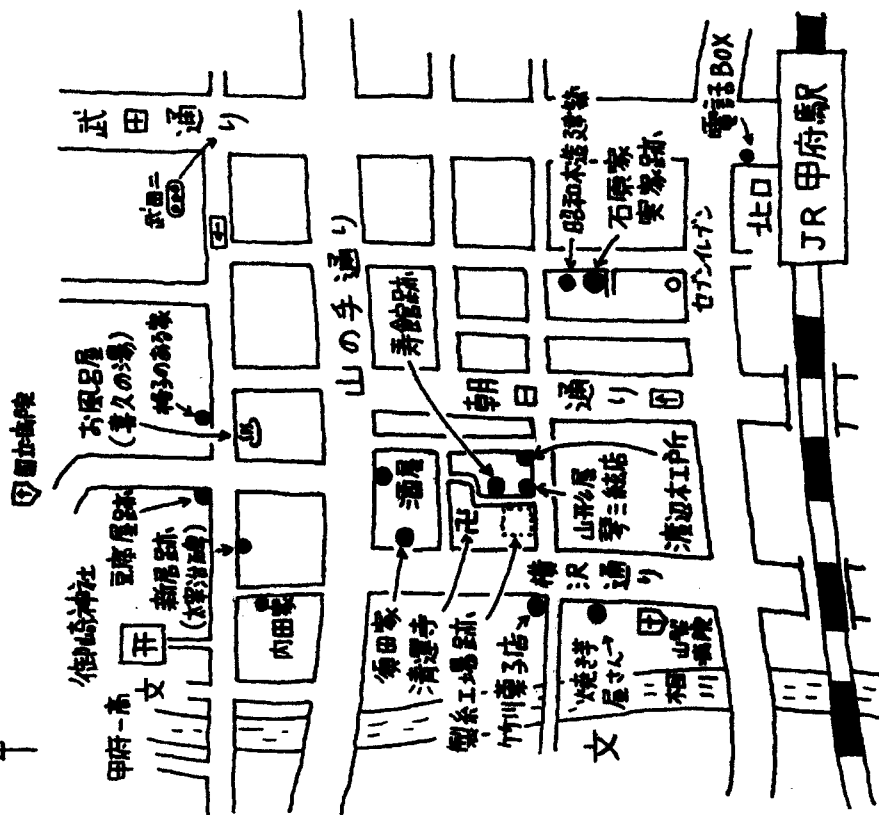


Illustration:
Mika Fujihara

小説家・太宰治が生涯で一番幸福だったとされる、
御崎(美咲)町でのハネムーン時代。妻美知子さんの
実家跡や二人の新居があった付近の昭和の木造建築、
太宰治記念碑、御崎神社などをめぐります。
太宰の生きた昭和という時代、そして甲府の御崎町での
生活を身近に感じていただく1日です。



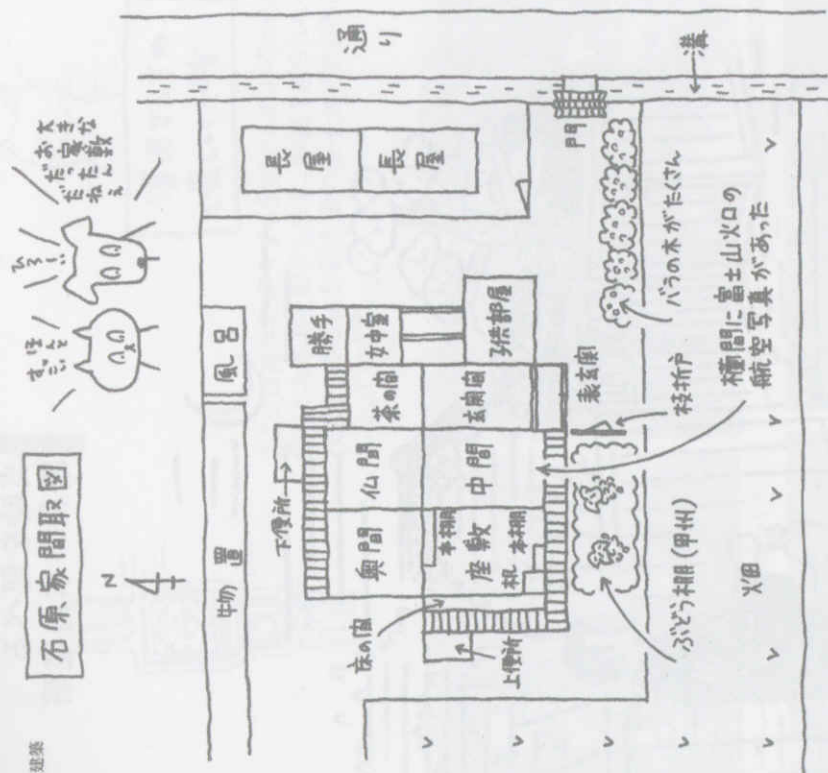
Illustration:
Mika Fujihara

水門町の実家

太宰治が、御坂の天下茶屋から甲府に降りてきたのが、昭和十三年十月のことでした。

井伏鱒二の勧めで、石原家の長女・美知子との縁談がまとまり、太宰にとつては新しい人生のスタートだったのです。

石原家は現在は広い駐車場になっており、その一角に小沢クリニックが建っています。当時は駐車場の南の道路まで石原家の私道だったといえますから、かなりの財産をもっていたようです。太宰が美知子と知り合った時には、石原家は家長である父親は他界してました。美知子の上の兄も病気で若くして亡くなっていました。その兄が太宰と同じ年に東京



帝国大学（現東京大学）に入学しており、美知子の母親は太宰に亡くなった長男の姿を重ねていたのだといいます。

石原のほうには太宰と美知子の結婚に反対する者もいたのですが、最後に結婚を決めたのは美知子本人だったようです。

昭和二十年、東京で空襲にあった太宰は家族と共に妻美知子の実家に疎開しています。その時の様子は小説『薄明』に描かれています。親子四人が、義妹美知子（下の妹）の家に厄介になることを「家を失った者のヒガミもあるのか、やっぱり何か、薄水を踏んで歩いているような気遣いがあった」と書いています。『薄明』には甲府空襲の様子がかなり克

明に書かれており、当時の町の様子を伺い知ることができます。

現在、石原家は美知子の弟・明さんが健在で、アメリカに住んでいます。お墓も敷島町に残っているということです。

昭和十四年の元旦、石原家の中庭で撮影した二枚。前列、太宰くらし、中列左より、美知子、美知子、美知子、後列、明。明がセルフタイマーで撮影したもの。



石原家間取り図



須田さんちの 小さい一枚

ここでは後半に紹介する須田さんのお宅から拝借したお写真を紹介します。中庭で撮られた一枚をはじめ昭和初期の頃の様子がわかる写真になっています。



子どもたちの服も立派です



昭和初期の保育園の様子



蓄音機を囲んでの一枚



後ろに縁側が見える中庭で

にたどり着きます。縁側のある中庭にはさほど背丈の低い植物が植えられています。昨今流行りのガーデニングで植えられる鮮やかな花などとは違い、ひっそりと咲く花に気品さえも感じられます。

現在のお家の様子を拝見させていただいたかたのですが、残念ながら今回取材できませんでした。

想像するに、太宰の妻美知子の実家もこのような佇まいだったのではないのでしょうか。前ページで紹介した石原家と太宰の写真はまさに中庭で撮られたものです。日本の風景の中からも昭和の住宅が消えつつあります。木と土と石で造られてきた日本の家をもう一度見直すチャンスかもしれません。

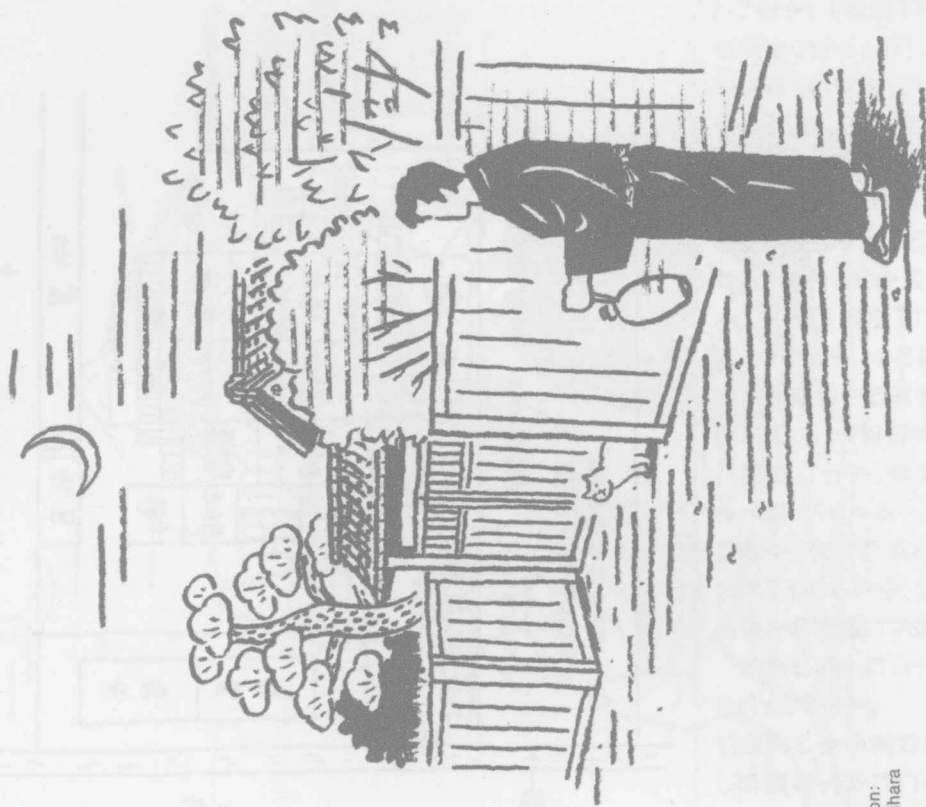


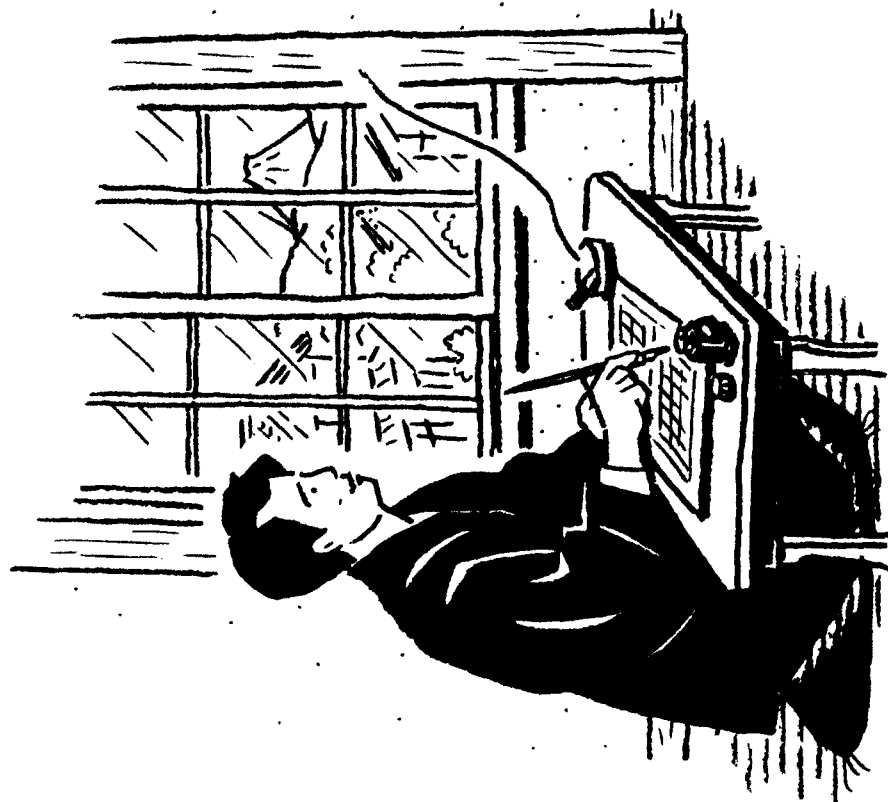
Illustration:
Mika Fujihara

太宰が住んだ昭和 木造建築

太宰が生きていた時代の住まいは木造建築が一般的でした。石原家は甲府空襲で焼けてしまい、その姿を私たちが見ることはできませんが、水門町、御崎町には戦災で焼けることなく当時のまま現在まで残されている建物があります。

石原家の実家跡近くにも戦災で焼け残り、昭和の面影を残した家がありました。

屋根は瓦葺きで、家の姓が刻まれている瓦が正面を向いています。正門は引き戸。引き戸にも瓦の屋根がついています。引き戸を開けて中に入ると地面には敷石が敷いてあり、その石の上を歩いて、玄関

Illustration:
Mika Fujihara

堅町の寿館

太宰は美知子との結婚が決まると、御坂峠を降りて、甲府へ移りました。その時、住んでいたのが、寿館です。現在はその姿を見ることはできませんが、寿館の様子を妻美知子は『回想の太宰治』の中で書いています。

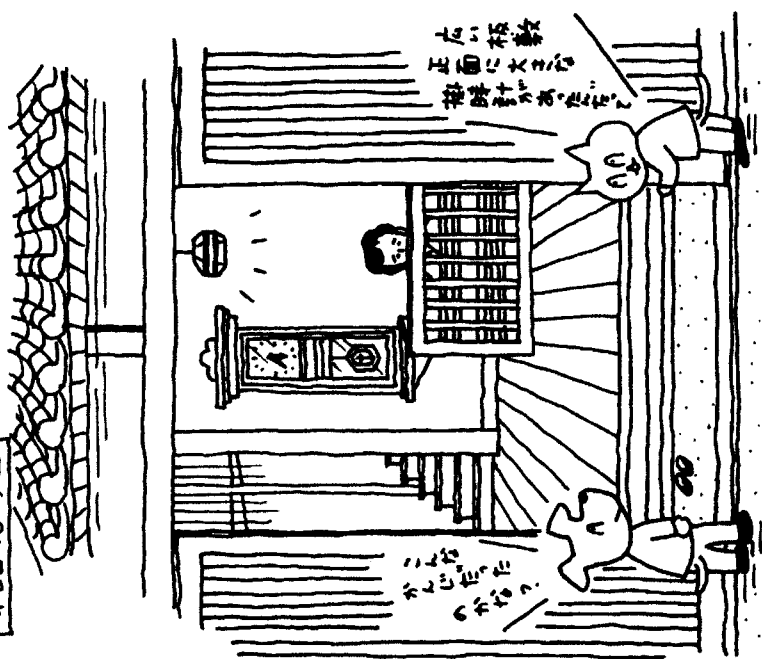
寿館は下宿屋らしい構えで、広い板敷の玄関の正面に大きい掛時計、その下が帳場、左手の階段を上り左奥の南向きの六畳が、太宰の借りた部屋である。

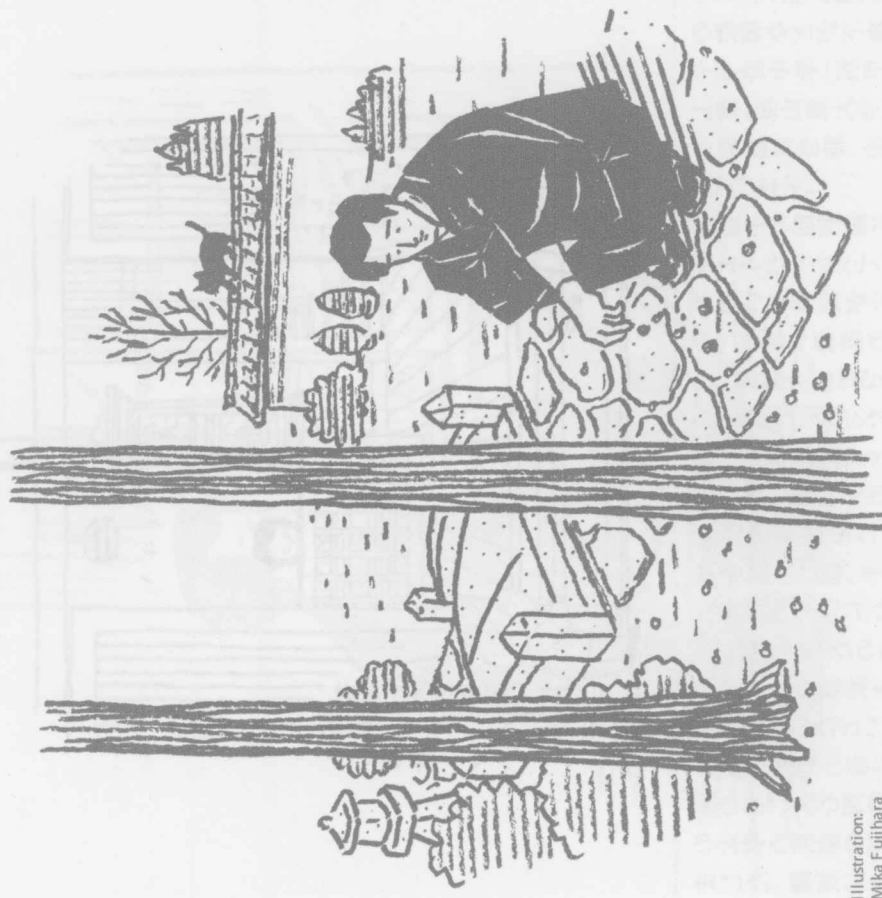
寿館を探してきたのは美知子の母親でした。荷物も持たず、勤めももたず、いわば風来坊の太宰のために義母は保証人になり

ました。御坂に来るまでの太宰の萩窪の下宿が西陽の差し込む四畳半と聞いて、美知子の母はひどく同情していたといいます。寿館から石原家までは歩いて数分だったので、太宰は毎日のように石原家に足を運んで、手料理とお酒を御馳走になっていました。美知子の母は座談の上手な太宰と話をするのが楽しんだようで、「母は今までつきあつたことのない職業の人の話を聞いて世間が広くなつたようだと言つていた」と美知子の回想録には書かれています。

寿館は当時、山梨高等工業(現山梨大学)の学生や甲府中学(現甲府二高)の教師などが下宿をしていました。入口には、「高

等御下宿寿館」という看板がかけてあつたといいます。現在、その当時の写真や資料は残っていません。寿館を経営していたのは菊島さんという塩山市出身の方だということはわかつたのですが、その後の消息はわかつていません。美知子の回想によると、寿館の主の菊島さんの息子さんは事故が病気のせいかで、足が不自由になり旧松本高校を中退して療養中であると太宰から聞いたと書いています。さらに『人間失格』のおわり近くに、不幸な薬局の女主人が登場する。私はこれを読んだとき、寿館の息子さんのことを連想したと続けています。

太宰治と
昭和機かし水道建築
見学ツアー

Illustration:
Mika Fujihara

佐那子の眠る寺

太宰が美知子と結婚をする前に一時住んでいた寿館の横道を上がったところに清運寺があります。寿館の横道は敷石の参道だったようですが、現在ではアスファルトの道路になっており、参道はお寺の中の一部にその姿を残しています。

執筆の合間、太宰は散歩がてら清運寺を訪れていたことでしょう。

さて、清運寺には意外な人のお墓があります。太宰とは縁もゆかりもない人物なのですが、太宰は昭和十三年十二月の『国民新聞』に「十月十二月十二」と題した随筆の中で偶然にもこんな文章を書いています。

ふと豆腐屋の硝子戸に写る私の姿もなんと、維新の志士のように見えた。志士にはちがいは、ないのである。追いつめられた志士、いまは甲府の安宿に身を寄せて、ひそかに再挙をはかっている。

太宰の本音がはつきりと表れた文章ですが、この一文に出てくる維新の志士に關係する人物のお墓が清運寺にはあるのです。「千葉佐那子」という名前を聞いてもピンとくる人は少ないでしょう。では坂本龍馬のいなすけといったら？ お龍では？ とみなさん答えるかもしれません。

清運寺にある千葉佐那子の墓標を見ると、確かに「明治二九年十月十五

日逝 坂本龍馬室」と刻まれています。「室」とは「妻」の意味です。

千葉佐那子は江戸の桶町で千葉道場を開いていた千葉定吉の長女でした。坂本龍馬は千葉道場で、安政三年から五年までの三年間、剣術の修行に励んでいたといえます。父定吉はそんな龍馬のことを気に入り、娘佐那子との仲をとりもとうと坂本家に手紙を出すのですが、坂本家からはよりよい返事は戻ってきませんでした。

司馬遼太郎の『龍馬が行く』の中でも佐那子は方的に龍馬のことを慕っているのだが、龍馬もその気持ちを知るか知らずかするりするりとかわしているという表現で描かれています。それならなぜ佐那子が龍馬のいなすけといわれているのでしょうか。それについては阿井景子著『龍馬のもう一人の妻』（毎日新聞社）の文中にこんなエピソードが紹介されています。

そう、あれは文久二年（一八六二）の秋、佐那子は「橋公の日記」を黒木綿の袷に包みこみ、龍馬に渡して欲しいとよしに頼んでいる。

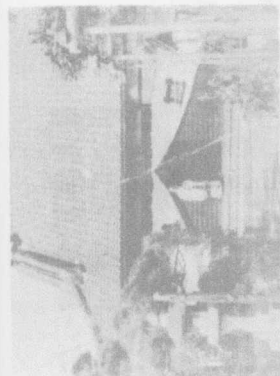
よしは、佐那に命じられた通り、早朝の庭掃き

の折、離れに起居していた龍馬にその袷を渡している。（渡して龍馬が身につけた袷が、どうして佐那の手もとに？ しかも片袖だけが…）問いたださずに、佐那は自嘲の色を浮かべて言った。「尾竹屋で坂本さんがくだすつたのよ。約束の証拠にと」「約束？」「ええ、いま考えると愚かしいけど、婚を約したという…」「それで、お嬢さまは晴れやかなお顔を」

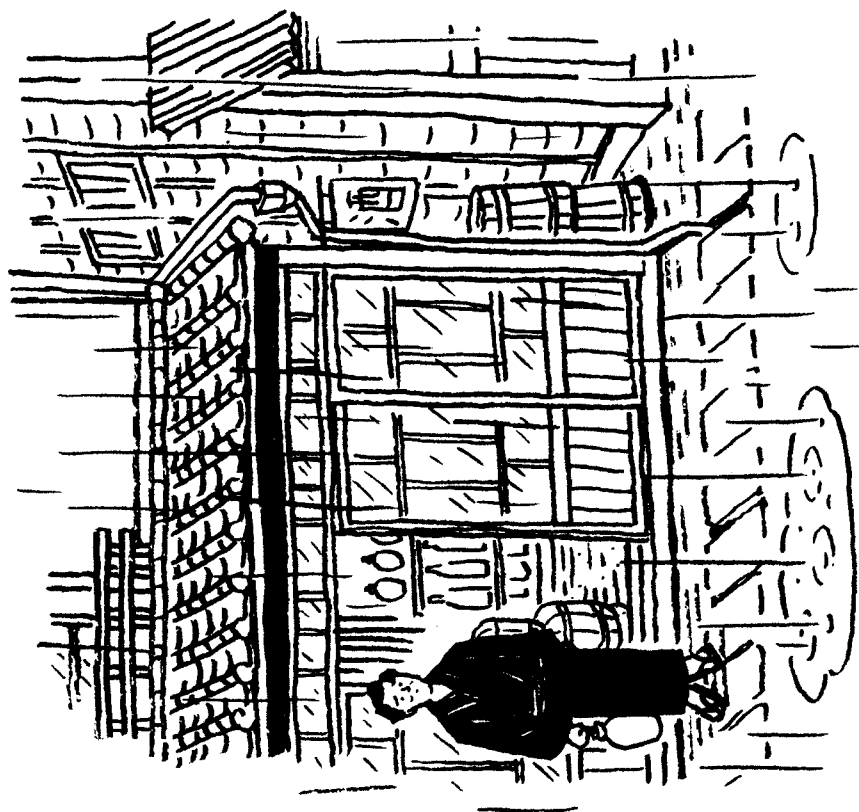
よしは謎が解けたと思った。

佐那子のせつない女心が表れた文ですが、その小袖は千葉家があつらえ、龍馬に進呈したものだという事です。

戦災で焼失する前の清運寺

太宰治と
昭和懐かし木造建築
見学ツアー

佐那子の墓

Illustration:
Mika Fujihara

酒、煙草、豆腐

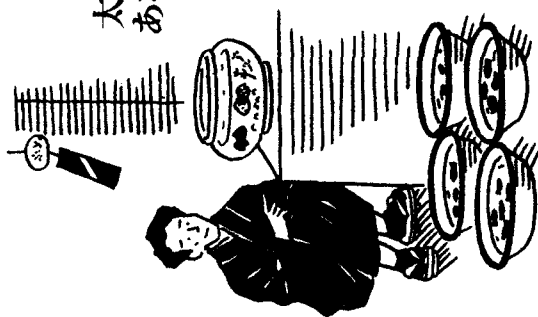
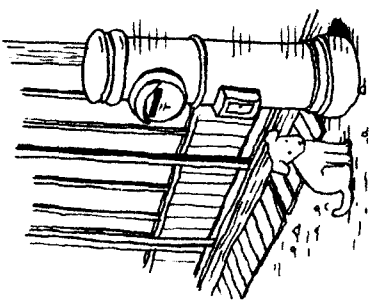
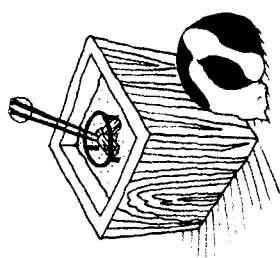
太宰が最も好んだもののひとつに酒があります。太宰の書いた小説にもたびたび登場しています。妻美知子の回想には太宰が酒を飲んだときの様子を次のように語っています。

いつもお銚子三本が適量だと言って、キリよく引きあげていたが、適量どころか火をつけたようなもので、このあと諸所を飲みまわって異郷での孤独をまぎらわせていたらしい。ある飲屋の女の人から「若様」などとよばれたなどという話だ。

これはまた美知子と結婚をしていない時、石原家に毎晩のように通っては手料理をこちそうになっ

Mika Fujihara Gallery

太宰の生きた昭和、
あなたの記憶の扉も開けてください。



ていた頃のことです。

酒の合間に硯箱や巻紙封筒を出させて、これは下宿にその用意がなかったからであろうか、ちやぶ台に向かったまま、左掌の上で巻紙を繰り出しながら毛筆を走らせて、私の母なども時折「荷札などをその手でやっていたが、私はとしよりの芸当ぐらに思っていたので、太宰がよその来の間で、私どもの前で、そうして手紙を書くのを見て、若くても文士というものはさすが遣っている」と感服した。

結婚してからも太宰は毎日変わらず小説を書いていた。銭湯へ行き、晩酌をしながら夕飯を食べてい

たようです。酒は四五十銭の地酒を主に注文し、月に酒屋に払う支払いは二十円くらいだったと美知子は書いています。酒の肴はもつば、湯豆腐、太宰夫婦の慎ましい生活が目につかれます。

夕方から酒を飲み、夜の九時頃までに、六、七合を飲んで陽気になり、ときには「お後伝兵衛」や「朝顔日記」の二節を語ったり、歌舞伎の声色を使ったりした。「アルタス、お前もか」などと言い出して手ごずることもあった。

太宰本人は飲みたいだけ飲んで、かなり陽気になり、倒れて寝てしまうということで、美知子の苦労が伺えます。

Illustration:
Mika Fujihara

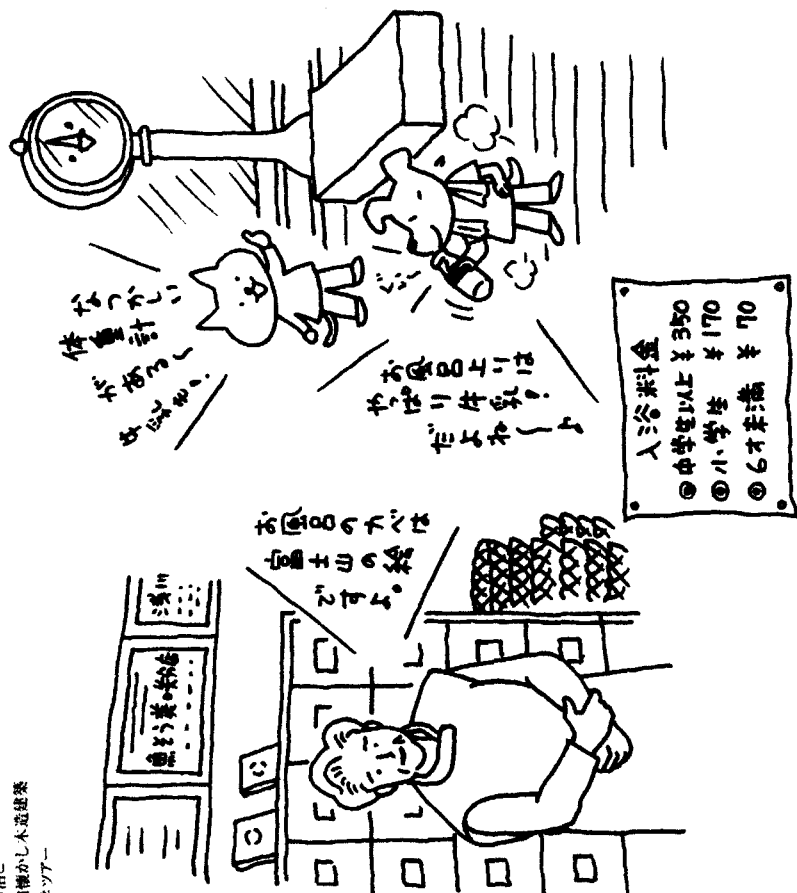
創業七十年

太宰が通った温泉

太宰は毎日三時頃まで机に向かい、それから近く
の喜久の湯に行つて汗を
流したといふ。喜久の
湯の創業は昭和九年、今
でも地元の方々の憩いの
場として親しまれています。

現在は二代目のご主人
と奥さん、そして息子さん
がその後を継いでいます。

「昔はお風呂が家にな
かつたでしょう。毎日、千
人くらいのお客さんがき
ました。」と話してくれた
のは喜久の湯に嫁いで五
六年の春江おばあちゃん。
七八歳にはけつして見え
ないお若さ。お肌はつるつ
るでした。喜久の湯の特
徴はそのお湯にあります。
一般的に銭湯は沸かし湯
ですが、喜久の湯は天然



温泉なのです。中にお邪
魔してみると、昭和の懐か
しい匂いがあちこちして
います。お風呂の中の壁は
やっぱり富士山。

「最近では壁に絵を描
く職人さんがいなくなつて
しまったよ」とおばあ
ちゃん。浴槽も洗い場も創
業当時のまま。タイルの床
がまたまたいい感じです。
脱衣所には今では珍しい
木の鍵のロッカー、大きな
体重計に全身が写る大き
な鏡。これはなんですか?
と聞いた木の台。「あー、
これは昔は赤ちゃんの着
替え用に使っていたのよ」
とのこと。今はほとんどの
家に内風呂があり、赤ち
ゃんをお風呂に連れてく
るお母さんも少なくな
たそうですが、その昔は当
たり前のようにこの台に

赤ちゃんを寝かせ、着替え
をさせていたそうです。台
は横に広く、一定の間隔で
区切っており、一つの台に何
人もの赤ちゃんが寝ころぶ
ようになっていました。

現在の銭湯の値段は大
人三五〇円。太宰の通つて
いた当時はどのくらいの値
段だったのでしょうか?

「そーねー。昭和十三
年くらいでしょう。多分、
何銭の時代だったんでしょ
うね」

当時、太宰は今のよう
に有名作家というわけでは
なく、毎日の温泉はか
なりの贅沢であり、彼自
身も楽しみみのひとつだった
のではないのでしょうか。それ
から温泉の後の杯はなん
といつても牛乳ですが、太
宰は家に戻つての晩酌が
楽しみだったようです。

Illustration:
Mika Fujihara

格子戸の家

喜久の湯の斜向かいに昭和の木造建築があります。ツアーの最初に見た、石原家の実家近くの木造建築とはまた違った趣の建物です。

喜久の湯に来ていたご近所のおばあちゃんに伺いました。

「こちら辺は昔、郭があったのよ。あゝその家は昔から変わってないね。周りにも昔はそういう家がたくさんあったのだけどね。みんな建て直してしまったみたいね」

南側が格子戸の美しい竹まいの中島家。京都の下町を思い起こさせる風情です。建築家の久保田さんによると、この竹まいは一般的な都市部の建築で、南側が格子戸になっている

のは、それなりの理由があるとのこと。中島家の場合、手前が公道になっています。「公と私を区切るもの」として格子戸が使われています。

「ここに住んでいる方は粋な生活をなさっていたのではないかと思います」と久保田さんはおっしゃいます。ここでいう「粋」とは、芸事や文化に精通していたということです。そのお話を伺うと京都の町にこのような格子戸の家が多いのもうなずけます。普通なら、板張りの戸にするところを格子戸にすることによって、光を通し、換気も出来る、しかし外からは中の様子は見えなという具合です。

「これは日本人が考えた日本独特の建築なのです」

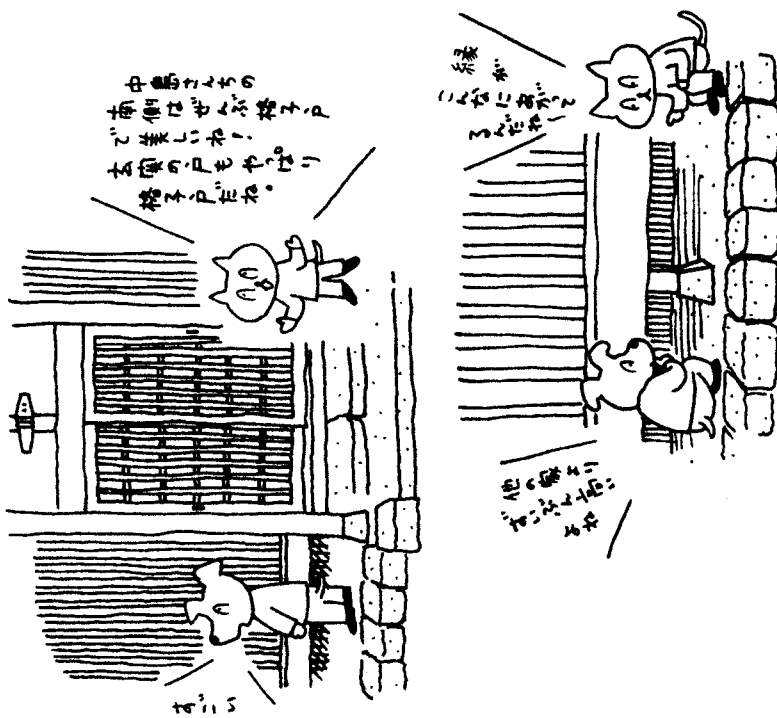
と語る窪田さん。

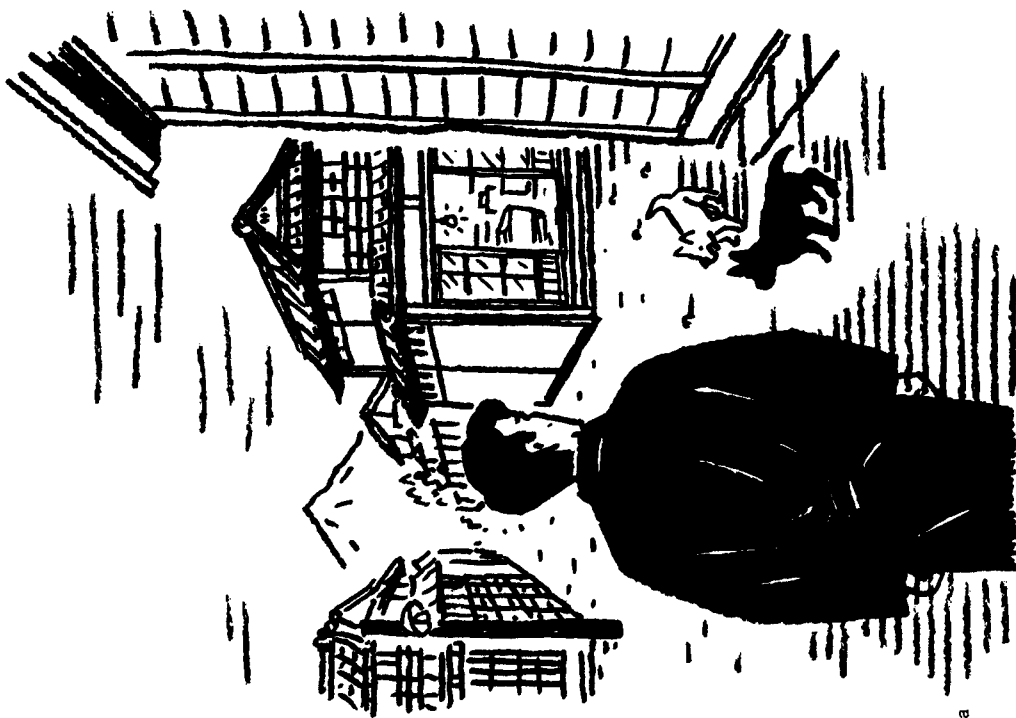
格子戸以外にも特徴があります。縁は上がついて、空気の通りをよくしています。屋根の瓦は三段組になっています。これは雨水が直接格子戸にかからないようにしているのです。

久保田さんはいます。

「建築を考える時、まずカタチより以前の背景を考える必要があります。日本人は実に合理的に自分達の住む家を考えてきました」

甲府市内には戦災で焼け残った家が多く残っています。久保田さんは現在、そういった家を保護し、残していく活動を行っています。皆さんもこれを機に、もう一度自分の住まいについて考えてみてはいかがでしょうか。



Illustration:
Mika Fujiwara

まぼろしの豆腐屋

喜久之湯を御崎神社方面に向かって歩いていった角に豆腐屋さんがありました。現在は駐車場になっています。妻美知子の回想によると

引越す前、酒屋煙草屋、豆腐屋、この三つの、彼に不可欠の店が近くに揃っていてお謎え向きだと、私の実家の人たちにひやかされたが、ほんとうにその利便はよかった。

酒の肴はもつぱら湯豆腐で、「津島さんではふたりきりなのに、何丁も豆腐を買ってどうするんだろう」と近隣で噂されているということが、廻り廻って私の耳に入り、呆れたことがある。

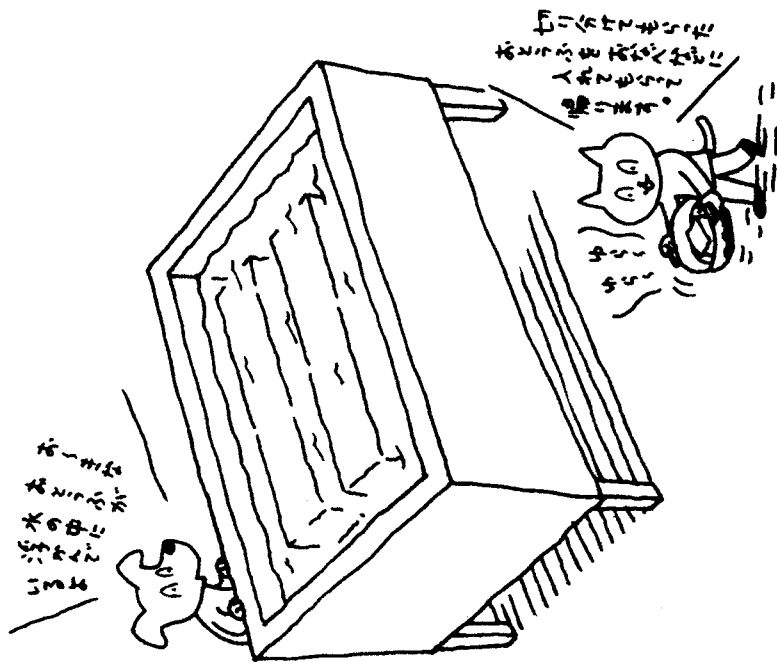
太宰は妻美知子の回想にもあるように、毎日豆腐を食べていたようです。太宰いわく「豆腐は酒の毒を消す。味噌汁は煙草の毒を消す」ということで、太宰は菌が悪かったことと、豆腐なら何丁食べても高が知れているところに豆腐を好む本当の理由はあつたようです。

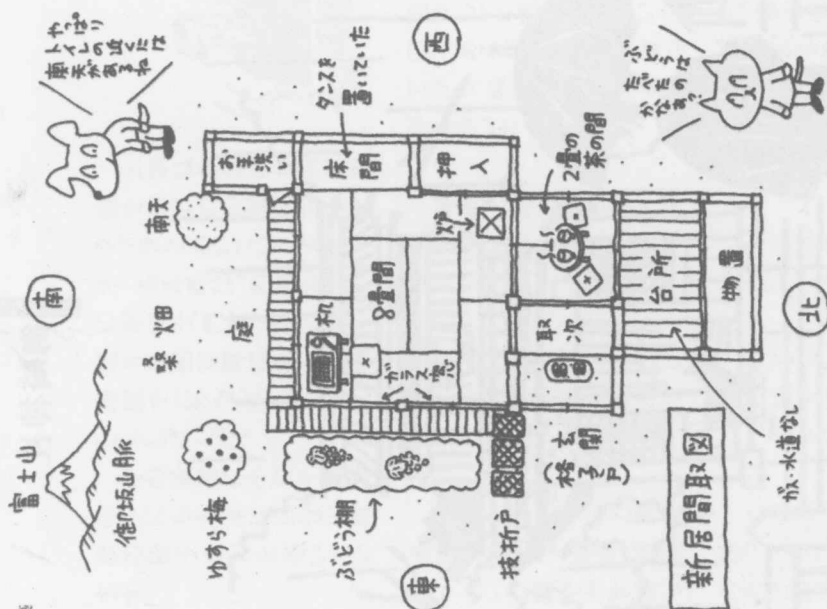
現在、豆腐屋の佇まいを見ることはできませんが、近所の方の話しによると大通りに面した部分が入口になっていて、中に豆腐を入れておく大きな水槽があつたそうです。屋根は瓦葺きで、昭和の建築そのものだつたといひます。太宰の新居に続く道側は、ガラス戸になっており、太宰の随筆の中でも、豆腐屋のガラス戸に写つた自分

の姿が維新の文士に見えたと書いていますので、豆腐屋の横道を歩いていたことがわかります。

小説の執筆が終わると、温泉に入り、煙草屋で煙草を調達し、豆腐屋で豆腐を何丁も買って家路につくといった太宰の生活の光景が目につかんできます。豆腐も今ではスーパーなどで簡単に手に入る時代ですが、当時は買い手が鍋などを持参して、水槽に浮かんだ大きな豆腐を切ってもらっていました。買うというより、分けてもらうといった感覚でした。

甲府市内でも少なくなっているという豆腐屋さん、水槽に浮かぶ豆腐のゆたかりとした光景こそが昭和の時代そのものではないでしょうか。





ていて、奥の方がこんど借りた家である。大家さんが薦だから、持ち地所に半ば自分で建て、外まわりもまめにてがけた家作といった感じであった。

太宰は何より六円五十銭という安い家賃を喜んだといいます。太宰本人もこの新居にいたところのことを『畜犬談』という小説に書いています。それによると太宰は、新居から歩いて四十九連隊の連兵場によく出かけていたようです。四十九連隊の連

御崎町の新居

太宰と妻美知子は昭和十四年の正月に新居となる御崎町の借家に移りました。現在では新居のあったという場所に「太宰治借居碑」の石碑があります。新居は戦災で焼けてしまい、当時の写真や資料は残っていないため、美知子の回想から当時の様子を探ってみましょう。

御崎町は上府中でも一番北に寄った文字通りの町はずれである。大家さんは鷹蔵(とびしよく)の秋山(マ)さんという彫り物をちらつかせたいなせな方で、借りるについてはうるさいことは何もいわなかった。

平家が二軒東向きに建つ

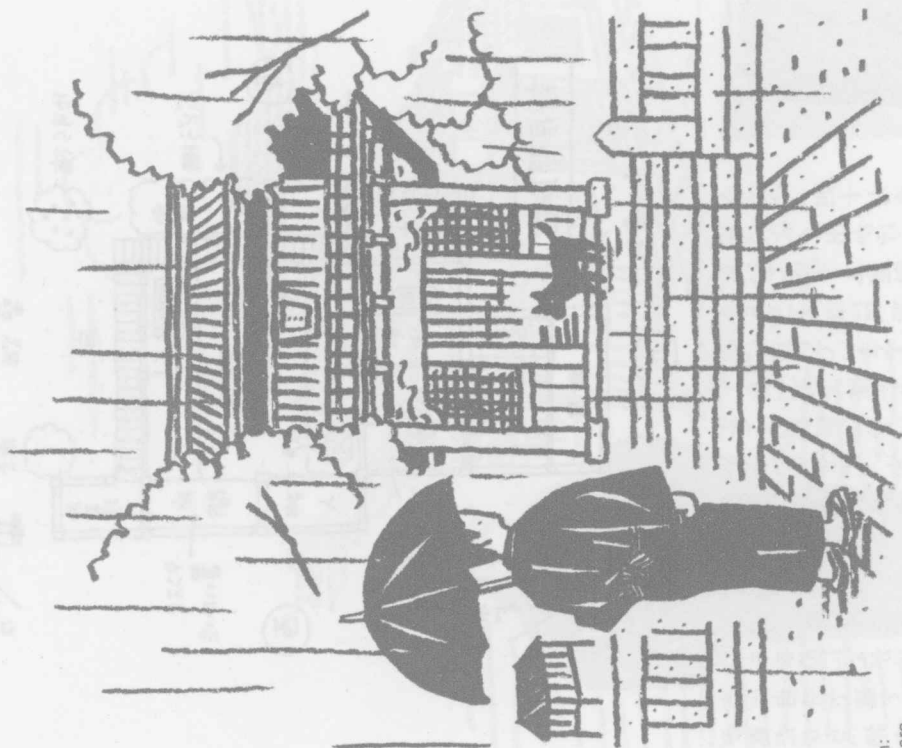
兵場は現在の緑ヶ丘スポーツ公園の辺りにありました。最近出来た福祉会館の入口のところに、「四十九連隊の連兵場入口」という標識が立っています。太宰はそこを抜けて、相川橋を渡り湯村温泉にもちよくちよく出かけていたといいます。

右ページのイラストは大家さんだつた亀山家の当時の写真から描き起こしたものです。この家の裏手にある家を太宰は新居として借りていたのです。当時の様子が偲べれます。



御崎神社の少し手前にある「太宰治借居跡」の石碑

Illustration:
Mika Fujihara

Illustration:
Mika Fujihara

ぼんやりと...

太宰は執筆の合間に住まいの御崎町界隈をウロウロとしていたようです。

御崎神社は太宰の新居からは目と鼻の先といった場所にある神社です。着流しに下駄といった姿で散歩をしている太宰を目撃していた人もいたでしょう。近所の人たちにお話を伺うと、「そういえばそんな風変わりな格好をした男が歩いていた、うちのおじいちゃんがいていました」という後日談を得ることができます。

その当時、無名作家であつた太宰はぼんやりと御崎神社を訪れては、猫や犬に話しかけていたかもしれません。

あなたの太宰目撃情報をお待ちしております。

太宰の散歩道



太宰は執筆の合間に甲府をはじめ山梨県内をウロウロと歩いていたようです。ある時は、和紙を買いに市川大門町まで行き、帰りに田富町にある小料理屋で一杯などといったこともしばしば。

その証拠に小説や随筆の中にも太宰は自分の散歩の様子などを書いていきます。

随筆「九月十月十一月」中の「甲府偵察のこと」では次のように書いています。

きらきら光るGペンを、たくさん財布にいれて、それを懷に抱いて歩いていると、何だか自分が清潔で、若々して、気持ちのいいものである。私はGペン買ってから、甲府のまちをぶらぶら歩いた。

甲府の町の景色、太宰の甲府に対する思いを述べています。

甲府は盆地である。いはばすりばちの底の町である。

まちを歩いて、ふと顔をあげると、山である。銀座通りという賑やかな美しいまちがある。堂々のデパートもある。道玄坂あるいている気持ちであるけれども、ふと顔をあげると

山である。べんに悲しい。

甲府は日ざしの強いまちである。道路に落ちる家々の軒の日影が、くつきり黒い。家の軒は一樣に低く、城下まちの落ちつきはある。表通りのデパートよりも、こんな裏まちに、甲府の文化を感じるのである。

太宰は妻美知子とも歩いていたようです。

けさは上天気ゆえ、家内と妹を連れて、武田神社へ、櫻を見に行く。

この日、美知子の母も誘ったようですが、おなかの具合が悪かったと続いています。

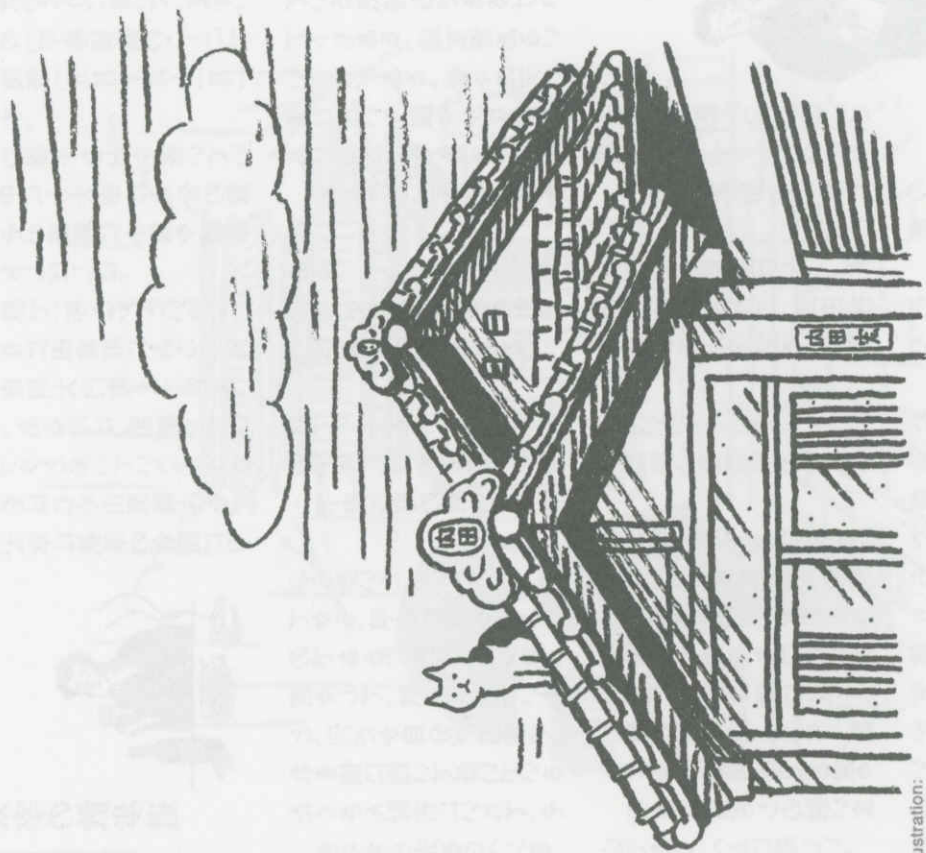


太宰が甲府にいた時代は現在と違って周りに高いビルやマンションなどはなかったはず。駅には蒸気機関車が走り、その汽笛は春館からもその後移り住んだ御崎町の新居からもかすかに聞こえていたといいます。夜はしんと静まりかえりそれが少し佐びしいくらいに感じていたかもしれません。

散歩をすることで東京や郷里弘前に思いを馳せその想いを強める。

太宰にとつての散歩は旅の途中の寄り道だったのかもしれません。



Illustration:
Mika Fujihara

昭和の写真博物館

御崎神社を南にくだと山の手通りにつながる細い路地があります。こちら辺は戦災にも焼けなかつたため、現在も昭和初期の建物がそのまま残っています。写真家内田宏さんのお宅もその軒。

内田さんは昭和二年、県庁に入庁し、農業普及の広報担当になったのをきつかけに、農業を中心とした県内の生活写真を撮りつづけてきました。その数は現在では九万枚を超えています。内田さんの写真には、昭和二十〜三十年代の山梨の農村の風景、子どもたちの様子がいきいきと写し出されています。

「昭和」という時代がどれだけ元気があつた時代かを改めて実感できる

内田宏 昭和の写真



「ちにゆうの豚」(昭和32年 甲府市)



「雪の日の登校」(昭和34年 甲府市)



「ジャンプ」(昭和32年 甲府市)



「楽しい雪遊び」(昭和36年 甲府市)



「前の人誰だ？」(昭和33年 甲府市)



「整列」(昭和32年 甲府市)

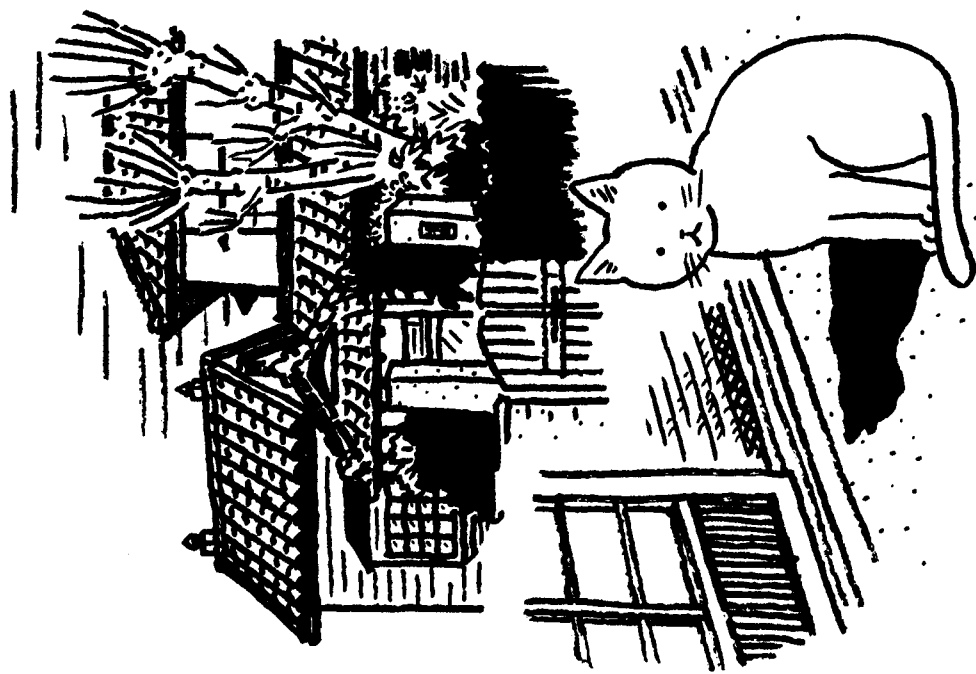
ものばかりです。

今回のツアーの中では内田さんのお宅にお邪魔し、これまで内田さんが撮ってきた昭和の写真の数々を拝見させていただきます。

そして、お茶でも飲みながら、内田さんの写真を見て、昭和にどっぷりつかってみようではありませんか。心も体もひと休みしましょう。

内田さんの写真は撮った年月がすぐわかるように、年代別に分け整理されています。



Illustration:
Mika Fujihara

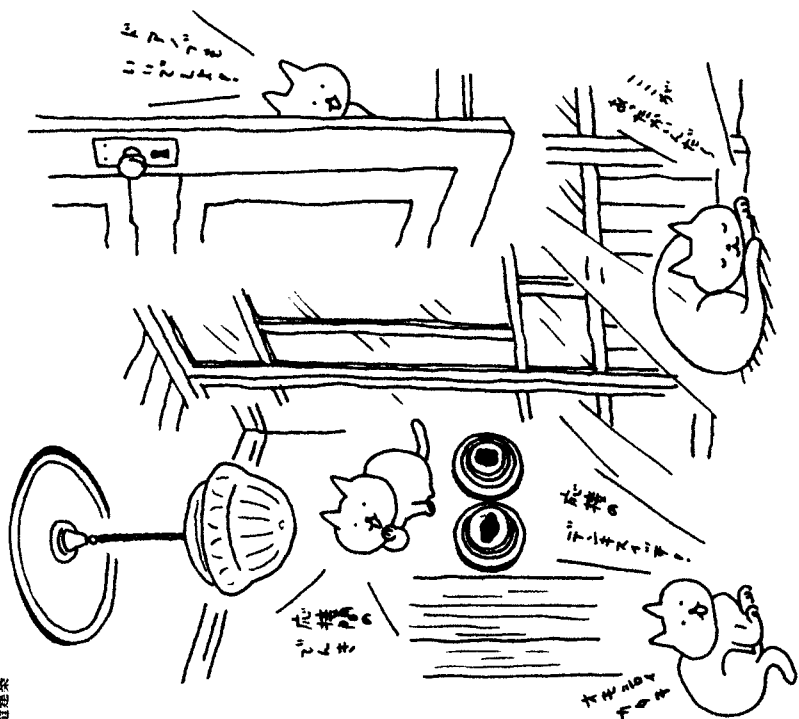
猫の住む家

横沢通りを下ると、左手に赤い屋根が見えます。そのお宅が今回お邪魔する須田家。

須田さんのお宅は正面左側に赤い屋根の洋館、右側が昭和の和風建築となっています。須田さんにお願いをして、中を拝見させていただきました。

玄関を入るとすぐ右手に洋室があり、その部屋に通されました。六畳のその洋室にはモダンなソファが置かれています。出窓もあり、当時としてはすごく贅沢な造りだったのでは…。

「見さんはまずこの部屋に通してみたいですね」と話してくれたのは須田さんのご主人。もと

太宰治と
昭和懐かし木造建築
見学ツアー

もとはこちら辺一帯の土地を持つ大地主だったようです。須田さんのお父さんは軍人さんで、玄関のところには刀も掛けてありました。須田家のアルバムを見せていただくと、その写真には当時の須田家の生活を偲ぶものばかり。

それにしても須田さんのお母さんは職業婦人だったようで、その活躍ぶりが写真の中からも伺うことができます。

須田さんのお宅は三月に取り壊しが決まっています。それは時代の流れと須田さんはいます。息子さんたちと一緒に住む家を建てるということです。これが見納めということで、奥のお部屋、二階も無理をいって見せてもらいました。部屋の中には猫が気

持ちよさそうに眠っていました。私たちの突然の訪問に「静かにしてね」といわんばかり目を細めて見えています。

建築家の久保田さんのお話によると、洋館の部分は日本人の生活の「陽」の部分、和室の部分は「陰」の部分だということ。古来から日本人は客人をもてなす場所は、家族が生活している部屋と分けて考え、「客間」といった空間を造ったそうです。須田さんのお宅はその典型であるということです。

横沢通りの目印須田家の赤い屋根はもうすぐなくなってしまうますが、須田家の歴史はこれからも続いていきます。それにしてもアノお宝たちはどうなるんだろう？

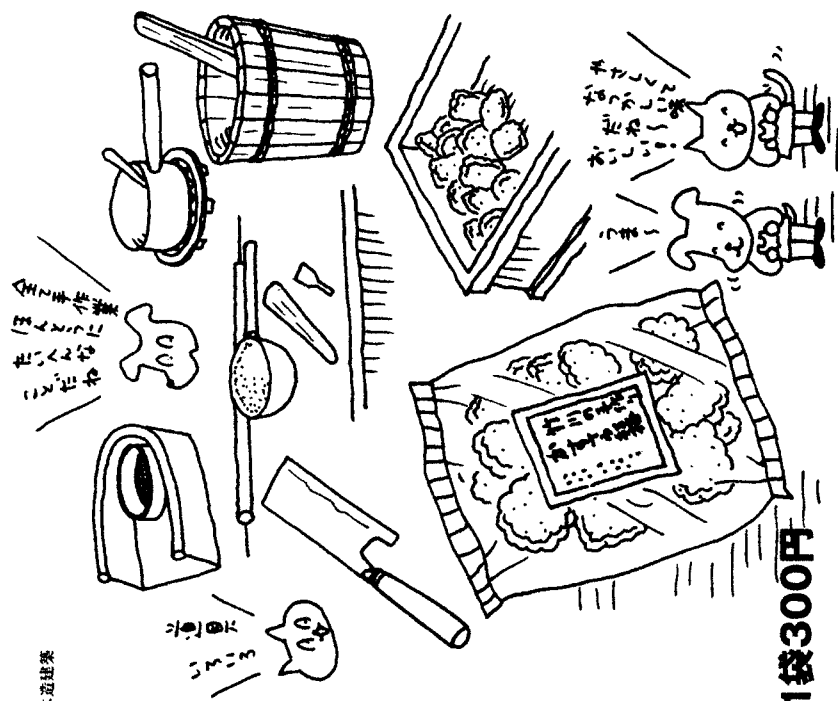
Illustration:
Mika Fujihara

懐かしい味

竹川菓子店は昭和の初めからこの地で紅梅焼きを焼いている老舗です。現在は竹川のおばあちゃんが一人でこの店を切り盛りしていますが、以前はおばあちゃんのご主人が作っていたそうです。作り方は誰かに教わったものなんですか？

「わたしは主人が焼いていたのをずっと見ていたものだからね、見よう見まねでやっています。主人の前はそのおじさんがやっていたみたいですが」

紅梅焼きはそのカタチが梅の花に似ていることから名付けられたといえます。おばあちゃんのご主人の父親が、他県の店でその作り方を習ってきて始めたということですが、



1袋300円

毎日毎日生地を作るときから手作業です。

「独特の柔らかさを出すために、生地もあんまり堅くならないように、かといってまとまらないう型で抜けないしね」と生地を作りながらおばあちゃんは話してくれました。

仕上がりはクッキーよりは柔らかく、スポンジケーキより固くといった紅梅焼き。材料は卵、小麦粉、砂糖、密といった天然素材ばかり。一回に作る分量もおばあちゃんの長年の勘によるもので、いちいち計りたりはしません。

材料をませたばかりの段階では、とろみが強くまとまらないのですが、台の上でゆつくりゆつくり幾度となく捏ねることで、まとまりがでてくるそうです。

「力をいれずゆつくりとゆつくりと捏ねていくんです。ほら触ってみてごらん」と生地を触るとなんともいえない感觸。この柔らかさが、あの紅梅焼きの甘味と食べやすさにつながっているかと思うと納得した気がしました。

生地から捏ねて型を抜き、焼くという作業までは三時間から四時間はかかるということです。一日に作れる量は一回の生地で五十袋程度。

「二人でやっているから大量生産はできないのよ」と笑うおばあちゃん。日中、焼く作業だけはお手伝いの方が二人来てくれるそうです。

一度食べたらくせになる懐かしい味、一度あなたも食べてみてください。



トマソンって何？

昭和初期の建物や風俗を調べていると必ず目にする「トマソン」という言葉。みなさんどんな意味がこ存じですか？

トマソンとは『老人力』で有名な作家でもあり芸術家でもある赤瀬川原平氏によって提唱された「超芸術」のことです。「超芸術」といっても何のことやら…といった感じですが、トマソンの定義によると「使えようがなくて無用になっているけど、何か怪しいが変な物」ということです。

一九七〇代、赤瀬川原平氏は講師をしていた美術学校で、ひとつの科目として「超芸術」を採るといふことをはじめました。同じ時期に『写真時代』（白

夜書房）という雑誌で彼は『超芸術』の連載をはじめることになりました。それにしても『超芸術』って呼びにくいし、もう少し馴染みやすい言い方はないのかね、ということになりいくつかの候補の中から「トマソン」という呼び方が選ばれたのです。

当時読売巨人軍にゲーリー・トマソンという選手が在籍していました。彼は大きな期待をされながら来日したのですが、あまり成績はふるわず、三振が多かったようです。本来ボールにバットを当てるためにいながら全く機能しない、という点がまさに「超芸術」と同じだったのです。そぞろ彼の名前をとって「トマソン」となったのです。（失礼やな、全く。笑）

不思議な家

横沢通りを下へとくだつていく途中、その不思議な建物に出会いました。

立ち止まってみると、おびただしい貼り紙が…。

「底の元販売」

何？周りを新聞や段ボールが被っています。その中におじさんが不思議そうな顔をしてわたしたちを見していました。

何を隠そうここは巷では有名な焼き芋屋さん。そのお味はと思い、一つ買ってみると「う、うまい！」と同絶賛。

ほんのりと塩がきいていて、なんともいえない美味しさです。シーズンにはこの横沢通りに行列ができるほどの人気ぶりだそうです。

それにしても不思議な空間だな。

Illustration:
Mika Fujihara

Illustration:
Mika Fujimura

和楽器を守る

横沢通りを東に入り、清蓮寺の入口のところに山形屋さんはあります。昭和の佇まいをそのまま残したそのお店は、三味線や琴などの和楽器の専門店です。ガラス戸を開けるとそこは外とは別世界といった時間がゆつたりと流れていました。私たちの声を聞いてかご主人の日原さんが覗きました。

「お久しぶりです。ちようどよかつた中に入つて」と迎えてくれました。中には、教材用の三味線と琴が展示されていました。

「平成十四年度から小中学校の音楽の授業に和楽器が取り入れられたでしょう。ようやく私たちの活動が受け入れられた



明や梅は花林の木
が一般的に使われ
るんだとこ

えっ、
おんなの
使っている
だこ

といったところです」

日原さんはこの二十年もの間ボランティアで各地を回り和楽器の普及に力を注いできました。学校教育に和楽器が入ったことで、今は大忙しだとい

います。「先日、も豊富の小学校で、琴を体験する授業があつたのですが、琴の貸し出しをしました」

実際に授業をやるにしても楽器が現場にないそうです。子どもたちは始めて目にする和楽器を素に楽しそうに手に取り弾くとい

います。「それからね、これを見てください」と日原さんがうれしそうに出した三味線。これは？

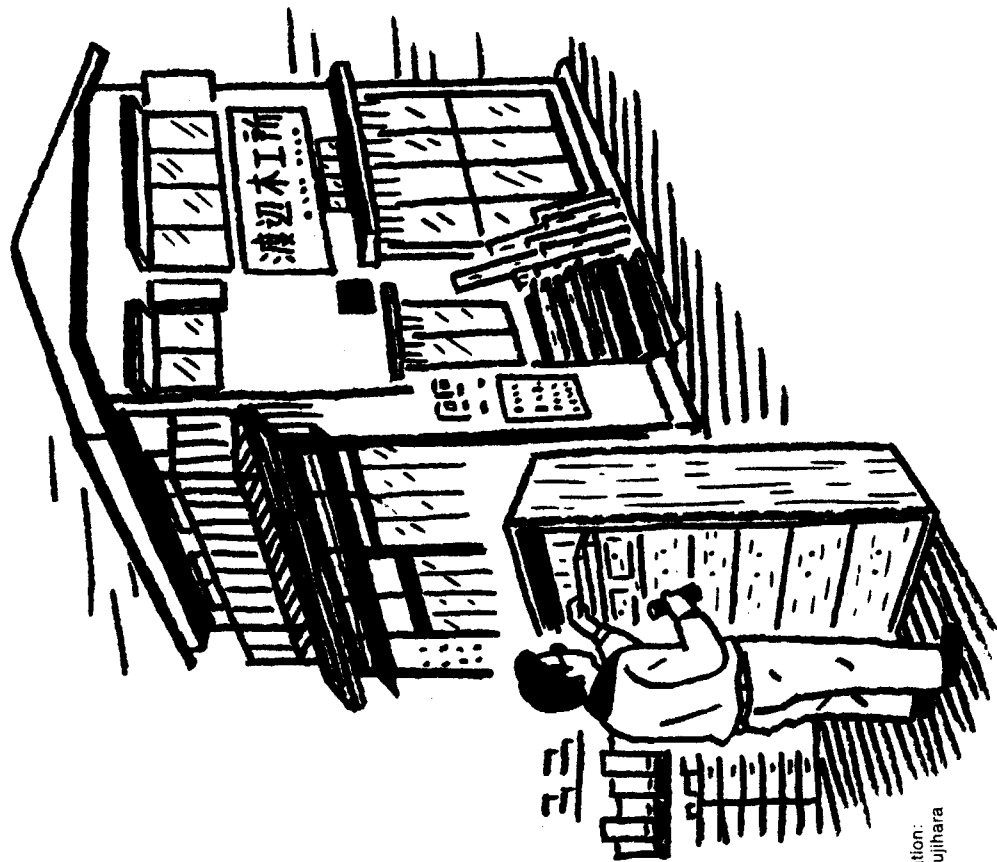
「これはうちの初代が作った三味線なんです、

去年ね、みつたんですよ」

山形屋さんは百五十年続いているお店で山梨県では番古和楽器屋さんです。その初代が作った三味線が昨年、偶然にも発見されたのだとい

います。「はじめ増穂に住むお客さんから修理をしてくれと頼まれたんですよ」修理をしようと皮を取ると、そこには山形屋の文字が刻まれていたということで、日原さんは驚き、何とかその三味線を手に入りたいと考えつには昨年の暮れ新しい三味線を手にお客さんを訪ねたとい

うことです。ちなみに三味線の皮は今合皮ですが、もともとは猫、そして犬の皮が使われていたって知っていました。

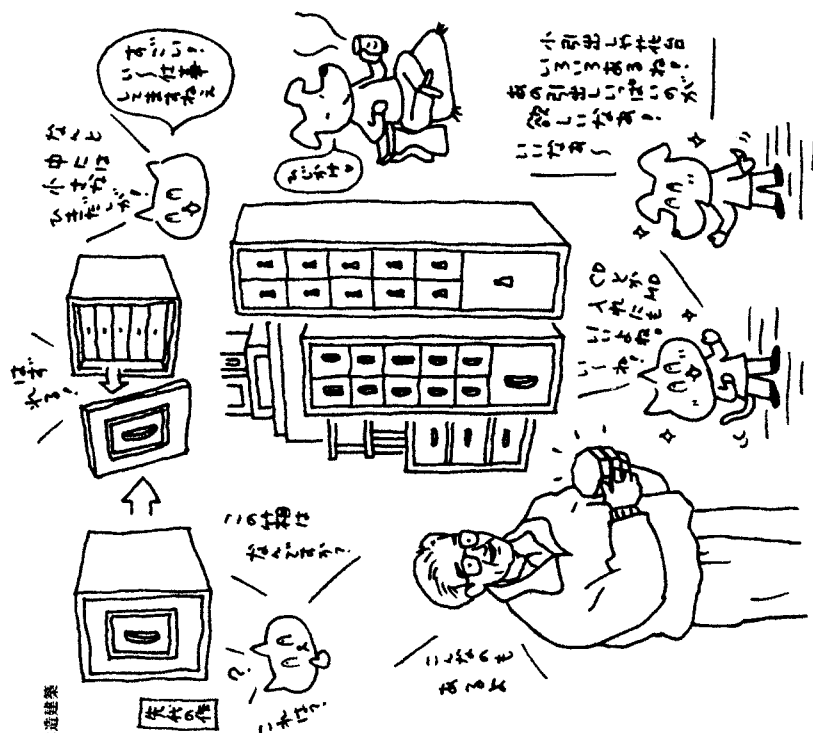
Illustration:
Mika Fujihara

指物師という仕事

山形屋さんに向かって登っていくと、渡辺木工所と書いてある看板が見えます。店先には、ご主人が作ったと思われる小さな可愛らしい家具が置かれ、小さく値段がついています。近づいてみると「五千円」とありました。ひとつひとつ丁寧に作られているその小さな家具。ご主人にお話を伺いたくなつて取材をお願いしました。

「先代からうちは指物師だつたんです」という渡辺さん。指物師とは、板を細かにさしあわせて作った筆筒や机小物入れを作る職人さんのことです。

大工さんではなく指物師という言葉にとっても興

太宰治と
昭和風かし木造建築
見学ツアー

味が湧き、仕事場を見せてもらいました。そこにはカンナがずらりと並んでいました。そして修理をしている途中だと話してくれた桐の筆筒やちやぶ台などが所狭しと置いてあります。

「以前はこの辺りにもうちみたいな指物師が何人かいたんですけどね。今は本当、少なくなつてしまつて」と語る渡辺さんのお宅も渡辺さんの代で終わらだといっていました。仕事場が住まいの続きになつていて、仕事をしている様子がお茶の間からも見ることが出来ます。

「私が子どもの頃は、親父の仕事を見よう見まねで手伝っていたから、これ

といつて教わることもなかったね」とのこと。お茶の間から仕事場を覗いている渡辺少年の姿が目につきました。

「今は桐の筆筒の修理とか、以前使っていた家具の修理なんかを頼まれてやっていますよ」

渡辺さんのような職人さんが十年後には日本からいなくなる、という記事を以前新聞で読んだことがあります。大切な日本伝統技術を守つていかなければとつくづく感じました。

桐の筆筒の修理、木机の修理、修復などのご用命は渡辺木工所へ。小さな手作り家具もぜひご覧ください。

[illegible][illegible]

この冊子は、2003年3月に甲府商工会議所とつなぐNPOとの連携により発行されたものですが、2005年度の甲府湯村温泉地域魅力づくり事業の一環として、甲府商工会議所の了解を得た上で、つなぐNPOが復刊したものです。

雄いの散歩道「甲斐の小道」づくり	
「甲府の宝物」ツアーガイドブック	
No. 01 太宰治と昭和懐かし木造建築見学ツアー	
発行	特定非営利活動法人つなぐ 〒400-0031 山梨県甲府市丸の内1-1-11 ボレスターションシティ甲府1207号 Tel&Fax 055-228-8633 http://www2a.biglobe.ne.jp/~yamaiku/
印刷	ほんほん堂
発行日	2008年1月1日